

「世界に果てなんてない！」

第2章 東南アジア歴訪!? ～カンボジアを中心に編～

前は、私が初めて訪れた国である東ティモールについて、書かせて頂きました。

今回は、これまで主にプライベートで訪れたアジアの国々から2か国について、それも国境付近を訪れた時について書いてみようと思います。

ーカンボジアの国境付近にて

カンボジアには、これまで3度ほど訪れたことがあります。その中で、2か所の国境付近を訪れた時のことを話します。

1か所目はバタンバンという、カンボジア西部にあるタイとの国境に面した州です。

この時は地雷撤去を行っている NGO をお願いをして、タイとの国境付近の地雷撤去現場まで連れて行って頂きました。



地雷の危険を知らせる看板

たどり着いたのは、タイとの国境付近にあるのどかな農村。内戦時はポルポト兵が最後まで抵抗した地域でもあります。その村を NGO の方に案内してもらいます。すると、ある場所で「ここからは必ず、私の歩いた後ろ以外は歩かないこと」と NGO の方は言います。どこに地雷が埋まっているか分からない場所だったのです。

でも周りを見ると、畑で農作業に精を出す大人がいて、元気に走り回る子供たちがいて、アジア農村のありふれた風景が目に映ります。

その風景に1つだけ今まで見たことのないものがありました。「地雷危険」と記された赤い看板。それが、時には民家の庭先にあったりするのです。

日常生活の中に、地雷というものが存在している、そのことに衝撃を受けました。



地雷撤去を行う村の方々

そんな環境の中で、NGO 支援し地雷撤去を行う村人がたくさんいました。「この村を昔のように地雷のない地雷のない平和な村にしたい」そう彼らは話してくれました。

自分の生まれ育った土地で、よりよく生きていきたい。こう思うのは、どこの国でも変

わりません。海外という「違い」が最初に目に入ってしまうますが、こう人と話すことで「同じ部分」に、自分は強く惹かれるようになりました。

カンボジアの 2 か所目はプレアビヒア寺院というタイとの国境にある遺跡です。ここは、2011 年にはタイと領有権を争い衝突も起きています。

寺院は山の上にあり、そこからはカンボジアを一望できます。私が訪れた時、ほとんど人はおらず、辺りは霧に包まれ幻想的な雰囲気漂っていました。そのため、カンボジアを一望できるという場所から何も見えません。いくら見ても真っ白です。

少し残念に思っていると、風が吹いてきて次第に霧が晴れてきました。そして、少しずつカンボジアの大地が現れてきました。

暗闇から次第に光がさすようで、その時の感動は忘れられません。

寺院の近くには、カンボジアとタイの国境ゲートがあります。訪れた当時、ゲートは固く閉ざされていて、辺りは迷彩服を着たカンボジア人が警備していました。少し物々しい雰囲気ではあるのですが、国境ゲートの少し手前の一画に、ふと目を止めました。そこには、花が植えられていた。全てを拒絶するかのような閉ざされた国境と、その少し手前に植えられている花。その 2 つが同じ空間にあることに、私は不思議な空間に思えました。

カンボジアで思ったのは、どんな環境であっても人間であるということです。地雷がある場所でも大人であれば畑を耕し、子どもなら元気に遊び、懸命に生きるということ。プレアビヒアでは、争いのある場所でも花を植えるという行為で心を忘れない。

人間というものの奥深さを垣間見たような気がしました。



霧に包まれるプレアビヒア寺院



寺院の高台からの風景



国境ゲートに植えられた花

ータイの国境付近にて

タイの北部にあるメーホーソンという場所を訪れたことがあります。ここは、ミャンマーと国境を接しており、当時のミャンマー軍事政権から逃れてきた少数民族が暮らす集落もあります。

その少数民族の集落を訪れるのが目的でした。恐らく皆さんも何かで聞いたことはあるかもしれませんが、女性が首を長くする風習のあるカレン族の集落もあります。

バイクタクシーに乗って、山道を進んでいきます。山道は所々デコボコしていて、また川のように水が絶え間なく流れている道路があり、ゾウが道を闊歩している中を進んでいきます。



道路を歩くゾウ

集落にたどり着くと、そこには写真や映像だけで見ていたカレン族の方々がいました。女性の中の幾人かが、首を長くしています。その由来は諸説あるので割愛しますが、それでもなぜこのような風習を持つようになったのか、惹かれるものがあります。

集落に入ると、どうやら観光客を受け入れているようで、お土産物を置いている店や、写真撮影も特に嫌な顔もせずを受けてくれます。観光客が入る場所だと、いろんなところでお金を要求されることもあるけど、ここでは特にそんなことはありませんでした。

フレンドリーだなと思いつつ、反面でこうしなければ生きていけない状況なのではないだろうか、それってどうなのだろう、という思いも巡ります。

また首を長くするという風習について、実際にやっている人はどう思っているのだろうという疑問も湧きました。

文化人類学者の立場にたてば、首を長くすることは立派な文化だ、となり得るし、人権という立場に立てば、女性の首を長くするなんて人権が守られていない、と言うことも出来るかもしれません。



カレン族の方と

どちらも正しいとも言えるし、同時に間違っているとも言えるかもしれません。1つの物事に対して視点を変えれば、今まで見えていたものとは違って見えるものです。

結局、人間なんて自分勝手な生き物なのかもしれません。自分に見えたものを、そのまま正しいと信じ込んで、人に押し付けようとしています。

ここに書かせて頂いている文章も、私の主観であって絶対的に正しいものでもなんでもありません。

他の人から見たら、全く違う解釈もあり得るものだと思います。

だからこそ、何か問題に思うことがあれば、大切なのは外から眺めるだけではなく、自分と異なる見解の人間や、何よりも当事者ときちんとコミュニケーションをすることなのだと思います。

短い期間だったので、カレン族の方々とそこまでの話をする事は出来ませんでした。そんな数日だけ来た人間に対して、簡単に本音で話してくれることなんて、まずないであろうとも思います。

それにしても、現地の人々を本当に理解するには、いったいどうすればよいのだろうか。そんなことを、この目を見たカレン族の姿を思い出すと考えたりもします。

(第3章青年海外協力隊～マラウイ編～へ続く)



カレン族の子ども